

論文の内容の要旨

論文題目 小説の維新史——小説はいかに明治維新を生き延びたか——

氏名 山本 良

「小説」という語は、漢書の「小説家者流、蓋出於稗官。街談巷語、道聽塗説者之所造也。」に見られるように、世俗の興味深い噂話といった意味であった。十九世紀に読本作者が、「国字小説」（都賀庭鐘『繁野話』序、寛延二、一七八六）を名乗ったのは、いまだ中国臭が濃厚な「小説」という言葉に、あえて「国字」のという限定を付し、中国白話小説に対峙させたためといわれる。享和年間（一八〇一～〇四）に、「小説」のような用法が使われはじめ、それ以後、中国白話小説の翻案という基本的な意味を揺曳しつつも、戯作全般を指す「小説」の用法が定着していった。

「国字小説」が現れてから、百年後の明治十八（一八八五）年、坪内逍遙が「小説」の語に「ノベル」という振り仮名を付したとき、「小説」は、さらに別の概念として再生したのである。戯作を指す「小説」が、「小説」へと生まれ変わる前、「小説」は明治維新という変革期を迎えた。明治維新が革命 revolution であるか、改革 reform であるか、復古 restoration にすぎなかったのか、一概に結論は出せないし、また、日本列島の歴史を通じて見た場合、戦国時代の終焉と豊臣政権の成立、つまり中世と近世の間にこそ、社会構造及び政体に関する最大の変動があったという見方が有力である。しかし、それでも、日本列島が、中国大陸以外の文明と接触し、そこから大量の文物が到来したのは、明治維新が初めてであった。実際の変革の成果は別として、この西からの衝撃を軽視することはできない。「小説」は、この衝撃をどう受け止め、この変革期をどう生き延びたか。

第一、二章では、幕末から明治初期の実録小説を扱う。幕末期、戯作・演劇に実録ものが流行した。幕府の検閲機能が弱体化したという事情が、この流行を促したのはたしかだが、一方にはまた、戯作の虚誕性を否定するような思想の高揚が存在したと考えられる。そしてこの動きが、維新後に勃興した歴史創出の潮流に接続したのである。この間の実録の流れを見通すため、幕末実録や末期戯作、新時代の小説家による実録小説を検討する。分析の対象は、『近世紀聞』（一八七四・三～一八八三・二、金松堂）や『開明小説春雨文庫』（一八七六・四～、文永堂）などの実録小説、そしてアヘン戦争や台湾出兵に取材した実録類である。

『近世紀聞』と『春雨文庫』は、ともに喜遊という遊女の伝を冒頭に置いている。両者には、同時代的な感性の一致が見られるのである。従来の実録小説形式を基盤にしながらも、明治維新という同時代的かつ歴史的な事象を描く両者を分析するにあたっては、幕末実録や末期戯作との比較が不可欠であり、論証は必然的に幕末以降の小説史全体に及ぶこととなる。

『海外余話』（酔夢痴人、嘉永四、一八五一）は、アヘン戦争で失脚した林則徐が再び登用され、イギリス軍と勇ましく交戦、遂に大勝利を収め、イギリスは清の属国となるといった結末を持つ。『海外余話』にはもう一種、「安政二発兌 禁売買 行餘堂蔵梓」と見返しにある新刻版が存在する。これは口絵挿絵を加え、読本の体裁となり、貸本屋の商品として流通したらしい。警世の書が、より広範な読者層へ向けた書物となった。はたして、イギリスが清の属国となる物語をどのような心性が受け入れると考えられたのか。

また、「台湾出兵」（明7、一八七四）や壬午軍乱（明十五、一八八三）を契機にして、「台湾もの」「朝鮮もの」等の刊行物が陸続と出版された。小説とはいいがたい刊行物が多いが、実録小説の体裁をとるもの、錦絵表紙草双紙の体裁を持つものも少なくない。これらは江戸初期以来の『太閤記』や国姓爺もの、天竺徳兵衛ものと連続しながら、幕末以来変化しつつあった対中国観・対朝鮮観を反映している。それは同時に対西欧観を裏返しに表現し、また国境を確定しつつある「日本」の自己表現ともなっている。

第三、四章は、政治小説を扱う。政治小説は、これまで基本的に自由党系の政治小説作者の研究に偏っていた。そ政治小説作者のありかたを、政党への帰属という条件のみにおいて考えてきたことがその原因である。そうした現状に新たな局面を開くために、改進黨系や非政党系の小説類を幅広く取り上げ、分析する。

畢竟政治小説の使命は、政治運動に具体的な表現を与えることであつた。ならば、来るべき革命の表象を示さない政治小説はない。政治小説に近接していた革命は、虚無党、フランス革命、そして明治維新であつた。それぞれの革命がどのように表象されているかを多種多様な言説を通して探る。虚無党とは「ニヒリスト」の翻訳語である。ツルゲーネフ『父と子』（1862）以降広まったといわれているが、日本ではツルゲーネフがまったく読まれていないにもかかわらずこの言葉が流通し始めた。革命的民主主義者を即座にニヒリストと呼ぶ発想は、当時のフランス革命観の形成をも左右し、政治小説及び民権運動に強い影響を及ぼした。

フランス革命二百周年を迎えたフランス国内でも、フランス革命の栄光に隠された多大な犠牲を暴き出し、強調するという修正派の見解が支持を増しつつある。だが、重要なのは、多大な犠牲の上に成立したフランス革命が人類にもたらしたものの重みを測定することであり、翻って相対的に犠牲の少なかった明治維新が、はたしてその後の社会に何をもたらしたかを考えることである。実は、こうした革命の解釈論争は、民権運動のさなかにすでに起こっていた。その中で警世された革命観は、当然政治小説の動向を左右する。現代社会に通ずる問題として、当時形成されていた革命観を検討する。

第五、六章は、翻訳の問題を考察する。明治維新後の言説空間を比喩的にいえば、〈翻訳〉空間と名付けることができる。政治や経済などの諸領域に分化される以前の、混沌とした状況は、異なる複数の言語によって成立した空間的な〈翻訳〉空間であり、同時に、維新以前の言語の再編成が試みられた時間的な〈翻訳〉空間であつた。ここでは、坪内逍遙や河島敬蔵によるシェイクスピア翻訳を分析対象とする。彼らのテキストに、〈翻訳〉空間の様態が先鋭的に表れているからである。坪内逍遙『はむれつものがたり旬國皇子班烈多物語』（「中央学術雑誌」九・十一號、明十八、一八八五年七月十日、八月十日）や河島敬蔵『歐洲戯曲ジュリアス、シーザルの劇』（「日本立憲政党新聞」明十六、一八八三年二月～四月）には、ヨーロッパの思想と江戸文芸の遺産が複雑に絡み合っており、また、レーゼ・ドラマという新たな形式を移入するにあた

り、院本や根本等の様式をどう再生させるかという課題に直面していて、思想のみならず形式の面でも、江戸と明治の〈翻訳〉を實踐している。彼らの翻訳の方法と、テキストの中で複数の言語体系が錯綜するさまを分析する。

第七、八章は、坪内逍遙『小説神髓』(一八八五・九～一八八六・四、松月堂)が小説界の主導権を握っていく過程を、諸領域の言説との相関において考察する。分析の視座のひとつは、〈美〉学である。明治十年代の〈美〉をめぐる言説は、東京大学を中心とする知的パラダイムの転換において、重要な役割を演じた。概括的にいえば、それは啓蒙思想や功利主義、実証主義から、観念論的傾向への転換である。そうした動向のなかで、『小説神髓』によって、江戸・明治期の稗史小説とは異なる〈小説〉の生産が提唱され、その後、〈美〉と〈小説〉とは急速に結びつけられる。そのような動きを美学化 aestheticization —— 理性の普遍性と感性の特殊性とを媒介する試み——と呼び、〈小説〉に関する言説を中心にその動向を分析する。

また、『小説神髓』の實踐といわれる『当世書生氣質』(一八八五・六～一八八六・一、晚青堂)以降、人情世態小説とよばれる小説の隆盛が、いわゆる近代文学史の主流を形成していったが、その過程には、近代的な視点からこぼれ落ちる多様な試みがあった。『鳥追阿松海上新話』の版元大倉孫兵衛は、饗庭篁村『当世商人氣質』(「読売新聞」明一九、一八八六年三月二三日～五月二〇日)を、「書生氣質の体裁にて出」そうともくろんだ。両者を氣質物として一括していたのである。事態は、坪内逍遙が期待していたのとは、異なる方向へ動き始めた。この後も、前田香雪『經濟小説金貸氣質』(明二十一、一八八八年十月、大坂駭々堂)や、風月散人『十人十色婦人氣質』(明二十、一八八七、共隆社)などの追隨作が出版される。ここでは、そうした試みの中から、明治の〈氣質物〉とでもよぶべき小説群を分析し、江戸と明治の連続について考察する。